

マタイによる福音書9章「新しい御業」

1A 前例のない恵み 1-17

1B 罪を赦す権威 1-8

2B 罪人の招き 9-13

3B 新しい皮袋 14-17

2A 前例のない奇蹟 18-34

1B 死からの蘇り 18-26

2B 盲目の癒し 27-31

3B 聖霊への冒瀆 32-34

3A 働き人のための祈り 35-38

本文

マタイによる福音書9章を開いてください。私たちは前回、8章にて、イエス様がご自分のことばの権威の現われを見てきました。らい病人を癒し、中風、熱病を癒し、それから荒れ狂うガリラヤ湖を静め、また墓場で暴れている悪霊どもを、その人から追い出されました。イエス様の言葉には、権威があります。私たちも、イエス様の言葉の権威の下に入るとき、つまりこの方の言われることに聞き従う時に、イエス様の力が現れます。

これらの奇蹟は、全く前例のないものでした。それもそのはず、神からこられたメシア、キリストなので、従来ユダヤ教の中ではありえないことばかりだったのです。主は、ご自身がおられることを現すために、新しいことを行なわれます。そして、これは人ではなく、神がなされたことなのだ、神をあがめるようにさせたいと願われています。しかし福音書には、今までのままでいたい、自分が新しい神の御霊の働きによって変えられるのではなく、今の自分たちのほうが心地よいのだとする古い性質を明らかにしています。9章は、これまで聖書を信じ、神を信じていたパリサイ人や律法学者が、イエス様の新しい働きについて疑問を投げかけ、批判をし、ついに冒瀆的なことまでを言い放つところを見ていきます。

1A 前例のない恵み 1-17

1B 罪を赦す権威 1-8

1 イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰られた。

弟子たちと共に向こう岸、ガダラ地方で悪霊を追い出された後で、再び舟に乗り戻って来ておられます。自分の町とは、カペナウムのことです。

2 すると見よ。人々が中風の人を床に寝かせたまま、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」と言われた。

百人隊長のしもべもそうでしたが、この人も中風を患っていました。中風は、体の付け根の部分に激しい痛みが走り、人を麻痺させる病です。一人で歩く事は到底できなかつたので、彼は床にふせているしかできなかつたのです。そして興味深いことは、イエス様がこの人を癒されたのは、彼自身の信仰のことではなく、彼を床に寝かせたままみもとに運んできた、その行動に表れている彼らの信仰です。イエス様が願われていたのは、信仰の回復です。人々が信じることのできる、新しい働きを行なわれています。人々は、いつまでたっても古いことの繰り返しでなかつたこの世界において、神がおられるという信仰を見失っています。しかし神は、「わたしはいるのだ」という証しをしたいと願って、キリストを遣わされました。

その第一声が、「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」でありました。これこそが、新しい働きです。神にしかできないことでもあります。人々は、いろいろな状況の中で悶え苦しんでいます。けれども、最も大きな病は罪そのものです。自分が神から離れてしまっているのです、どんなに自分を良くしようと思っても、元の本阿弥の中に戻って来てしまいます。ですから、人が罪の赦しを受ける時、それは全く新しいことです。心の奥底から、魂から癒しと安息を受けましょう。そして、イエス様が、中風の癒しの前に罪の赦しを優先されたことにもお気づきください。中風が治ることは素晴らしいですが、それよりも霊の癒しのほうが優れています。すべての源であられる神とのつながりを、罪の赦しによって持つことができるからです。そもそも、アダムが罪を犯したために、病が世界に入り、死が入りました。その罪を取り除くことによって、肉体の癒しも後に約束されます。

3 すると、律法学者たちが何人かそこにおいて、心の中で「この人は神を冒瀆している」と言った。

律法学者の言っていることは正しいです。罪を赦すということは、神にしかできないことです。ですから、イエスが神からの方でなければ、このようなことを言うのは確かに冒瀆です。しかし、イエスが神からの方であればどうでしょうか？これこそが、良き知らせであり、喜ぶべきことです。ちなみに、なぜここに律法学者たちがいたかと言いますと、彼らはイエスがメシアなのかどうか確かめるため、調べに来るためにやってきました。

4 イエスは彼らの思いを知って言われた。「なぜ心の中で悪いことを考えているのか。」

イエス様は、心の中を探ることのできる方です。全てを心の中まで知っておられるので、それを明らかにされました。私たちも、「心の中に思っている、表に出さなければ悪くない」と思うかもしれませんが、いいえ、心にあることは必ず表に出ています。

5 『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。6 しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために——。」そう言って、それから中風の人に「起きて寝床を担ぎ、家に帰りなさい」と言われた。7 すると彼は起き上がり、家に帰った。

もちろん、罪が赦されたということのほうが易しいです。罪が赦されることは目に見えないからです。けれども、罪が赦す権威があるのだということを示すために、敢えて中風を癒すことにお決めになりました。このことによって罪の赦しが確かに行なわれたことをお示しになりました。キリスト教会には、その権威がイエス様から任されていることを思います。「聖霊を受けなさい。あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残ります。(ヨハネ 20:23)」このことを、イエス様の名によって威厳をもって宣言していきたいです。

8 群衆はそれを見て恐ろしくなり、このような権威を人にお与えになった神をあがめた。

群衆は恐ろしくなりました、そうでしょう、こんなことは聞いたこともないことであり、ただ神が行なわれたことなのだとしか認められないからです。

2B 罪人の招き 9-13

9 イエスはそこから進んで行き、マタイという人が収税所に座っているのを見て、「わたしについて来なさい」と言われた。すると、彼は立ち上がってイエスに従った。

イエス様の新しい働きは、その力の偉大さに留まりません。罪が赦されましたという宣言にあるように、その恵み深さがかつてないこと、驚くべきことです。そしてここも同じです、イエス様が弟子として呼び出されたのは、ユダヤ人に憎まれ、罪人にされていた取税人です。人を搾取することは、律法で禁じられています。けれども、取税人はローマの手先としてユダヤ人から徴税していました。そのために、取税人はユダヤ社会との関わりから引き離されていました。その取税人であるマタイを、イエス様はご自分の弟子として招き入れられたのです。

ちなみにマタイが、この福音書を書いています、書き方がとても几帳面です。他の福音書にあるような、ダイナミックな表現が少ないです。元・取税人であった気質が出ているのでしょう。

10 イエスが家の中で食事の席に着いておられたとき、見よ、取税人たちや罪人たちが大勢来て、イエスや弟子たちとともに食卓に着いていた。11 これを見たパリサイ人たちは弟子たちに、「なぜあなたがたの先生は、取税人たちや罪人たちと一緒に食事をするのですか」と言った。

イエス様が、マタイの家に招かれました。そこに、仲間の取税人が大勢来ました。また他の罪人

も来ています。ここでの「罪人」は、取税人と同じように律法を明らかに犯している者たちで、ユダヤ人共同体から外されている人々のことです。例えば遊女はそれに当たります。そこで、パリサイ人たちが弟子たちに言いました。先ほどは律法学者でしたが、彼はもっと神学的なことを問題にしましたが、パリサイ人は実生活における聖別、汚れとの分離を強調していました。そして初めは心の中で思っただけのことだったのですが、今は、はっきりと口に出して非難しています。ここで、イエス様ご自身ではなく、弟子たちに非難していることに注目してください。敵は必ず、弱いところに攻めてきます。しかし、イエス様はご自分の弟子たちを守られます。

なぜ、「一緒に食事をする」ということが非難の元になるのか？当時の社会では、「食事をする、その人と一つになる」と信じられていたからです。聖餐式も同じ意味合いをもって守っています。一つのパン、一つのぶどう酒、その他、一つの食事を取ることによって、同じものがそれぞれの体内に吸収されます。同じものを分け合って食べたことにより、それで神秘的に一つにされていると信じていました。そして、聖餐式は主との交わりであり、また主にあって互いの交わりでもあるのです。

12 イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。13『わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」

主が来られたのは、病人のためであるということ。それは、罪人を招くためということを喩えるためです。つまり、全ての人が、それぞれが、自分の罪を認識しなければ、イエス様がその人に近づいて、触れることはできないということです。イエス様を私たちから追い出す最も効果的な方法は、自分が正しいとすることです。自分を正しくしようとすることです。これは、イエス様の心を大きく大きく損なうことです。なぜなら、ここでイエス様がホセアの預言を引用されているように、神の喜びとしておられるのは、いけにえ以上に真実な愛、あるいは憐れみなのです。パリサイ派は、自分がどのように行すべきかに注目していたのですが、神は私たちの行ないに関わらず、ご自分が憐れみを示すことに喜びを覚えておられます。

3B 新しい皮袋 14-17

14 それから、ヨハネの弟子たちがイエスのところに来て、「私たちとパリサイ人はたびたび断食をしているのに、なぜあなたの弟子たちは断食をしないのですか」と言った。

パリサイ人たちは、週に二回、断食をしていました。経緯は次の通りです。バビロン捕囚の後に、ユダヤ人たちは深い悔恨の中に入りました。自分たちが律法を守らなかったら、このようなことになったのだと悔いました。それで、学者エズラが律法を回復させる運動を行ないました。それが律法学者の始まりです。けれども、その間に、律法を守ることの本質的なことを忘れ、守る事自体が目的化しました。エズラから始まった律法の解き明かしに、後世の指導者は、さらに何が律法に適

って、そうでないのかの命令を加えて行きました。これを「垣根」と言います。そして 400 年経った時には、それが口伝律法となり、聖書と同じような権威を持っていたのです。

ところが、イエス様の弟子は断食していません。先ほどのレビの家での食事に、イエス様が招かれて弟子たちもそこにいましたが、食事をしています。それで、「イエスがメシアであるなら、このおきてを破るはずはない」と思ったのです。今、パリサイ人ではなく、バプテスマのヨハネの弟子たちがやってきています。ヨハネ自身は、イエス様が高められ、自分は衰えなければいけないとし、自分の弟子たちをイエスに向くようにしましたが、彼は今、ヘロデによって幽閉されています。そこで彼についていった弟子たちが、今、イエスの弟子たちのことで、多少なりとも妬みを覚えていたのでしょうか。ヨハネが行なっていたことなのに、なぜあなたは行わないのですかと尋ねています。

15 イエスは彼らに言われた。「花婿に付き添う友人たちは、花婿と一緒にいる間、悲しむことができるでしょうか。しかし、彼らから花婿が取り去られる日が来ます。そのときには断食をします。

イエス様は、ご自身を花婿にし、弟子たちをその友人にしています。今は、喜びの時であるが、自分が取り去られる日、つまり十字架に付けられる。その時には断食をする、つまり嘆き悲しむということです。断食は、罪の悔恨や嘆きのために行うことが多いので、そう言われているのです。

16 だれも、真新しい布切れで古い衣に継ぎを当てたりはしません。そんな継ぎ切れは衣を引き裂き、破れがもっとひどくなるからです。17 また、人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりはしません。そんなことをすれば皮袋は裂け、ぶどう酒が流れ出て、皮袋もだめになります。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れます。そうすれば両方とも保てます。」

午前礼拝は、この箇所を取り扱いました、ぜひお聞きください。イエス様は、ユダヤ教の改革を行なったのではありませんでした。既存のものを改善させていこう、改良しようとしておられませんでした。神の訪れと言ってよいでしょう、新しい御霊の働きをもたらしておられます。もちろん、古くから預言されていた方であり、律法の成就であられる方ですが、その完全な現われはかつてないものでした。聞いたことも、見たこともなかったのです。ですから、こういった新しい働きを受け入れには、私たちの心も空にならないといけません。自分自身が、これまで正しいと思ってやってきたことであっても、神の恵みはそれを否定されます。みな、神の憐れみによって生きるようにされているのです。

2A 前例のない奇蹟 18-34

そして、マタイはその後に起こることが、まさに新しい皮袋の中に入った、新しいぶどう酒のような働きとして紹介しています。これまでに聞いたことのなかったようなことです。

1B 死からの蘇り 18-26

18 イエスがこれらのことを話しておられると、見よ、一人の会堂司が来てひれ伏し、「私の娘が今、死にました。でも、おいでになって娘の上に手を置いてやってください。そうすれば娘は生き返ります」と言った。19 そこでイエスは立ち上がり、彼について行かれた。弟子たちも従った。

イエス様が、新しい皮袋と新しいぶどう酒のことを語っておられた、その頃です。「一人の会堂司」が来ました。これは、ユダヤ教の会堂、シナゴグの管理者のことです。単なる建物の管理者以上に、霊的なことも含めて会堂を管理していました。そこで、彼はユダヤ社会の中ではとても高い地位にいて、尊敬されていたような人物です。しかし、今、彼はイエス様の前にひれ伏しているのです。そうです、彼は自分を正しいとせず、心貧しき者となり、それゆえ古い皮袋ではなく新しい皮袋に変えられていたのです。

彼がそのようになったのは、自分の娘が死にかけていたことです。ここで、「私の娘が今、死にました。でも、おいでになって娘の上に手を置いてやってください。そうすれば娘は生き返ります」と彼は言っています。他の福音書では、彼女が死にかけているとあります。けれども、初めはそう言っていたのですが、後になって死んでしまったという知らせを受けた、ということです。けれども、イエス様が信じなさいと励まされたので、今、娘は生き返りますとはっきりと信仰を持っています。

20 すると見よ。十二年の間長血をわずらっている女の人が、イエスのうしろから近づいて、その衣の房に触れた。21 「この方の衣に触れさえすれば、私は救われる」と心のうちで考えたからである。22 イエスは振り向いて、彼女を見て言われた。「娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、その時から彼女は癒やされた。

長血を患う女ですが、らい病人と同じようにレビ記において不浄とされています。それが12年間も続いていました。ここに、福音の平等性が見えます。ユダヤ人社会では高い地位にいた娘と、同じ社会で阻害されている長血を患う女は、イエス様を必要としているというところで、全く同じところに立っています。死が訪れるのは、金持ちも貧乏人も、どんな人も平等であるように、人を生かす福音も平等に人々に与えられています。

そして、彼女の信仰の姿がとても生き生きとしています。それは、「この方の衣に触れさえすれば、私は救われる」と言っていることです。イエス様の衣に触れるという、とても具体的なところで信仰を働かせたことです。そうです、信仰というのはかなり積極的に、具体的に働かせるものであります。消極的に、「私はこれこれを信じている」ということもあるでしょう。けれども、イエス様のことについて、「主がこのことを行なわれたいのだから、このことを願われているから、だから私は、これこれ具体的なことについて行なっていこう。」ということです。別にイエス様の衣でなくてもよかったです。けれども、イエス様には癒す力があると彼女は信じていました。それを、「衣に触れれ

ば癒される」と具体的に信仰を働かせたのです。

癒しについては、いろいろな方法を神は使われます。ある時は触れて、ある時は言葉を出されるだけで、それぞれ異なります。ある法則や公式があって、それをやれば救われる、癒されるということではないのです。けれども、それぞれがとても具体的です。イエス様がつばを吐いて、それで泥を作って、盲目の者の目にぬりました。そしてシヌアルの池に行き、泥を洗い落としなさいと言われました。それは、とても長い道のりですが、誰かが彼の腕を掴んで、いっしょに降りて行ってあげたのでしょう。他の場合は、一度では目が明かず、二度目で完全に見えるようになる場合もあります。ですから、どれによって癒されるか分からないのですが、はっきりしているのは、どの方法であろうと具体的に信仰を働かせているということです。

皆さんが救われた時は、いろいろな方法だったでしょう。アメリカの教会では見たことがありませんでしたが、日本で体験したことは、聖餐式を用いて主が救ってくださることです。普段なら、理屈では福音を聞いても信じないけれども、聖餐にあずかる時に、そのパンとぶどう酒を取って食べるという行為によって、自分の信仰を働かせました。こういうことです、何らかの形でご自分に与えられている信仰を働かせるのです。

23 イエスは会堂司の家に着き、笛吹く者たちや騒いでいる群衆を見て、24 「出て行きなさい。その少女は死んだのではなく、眠っているのです」と言われた。人々はイエスをあざ笑った。25 群衆が外に出されると、イエスは中に入り、少女の手を取られた。すると少女は起き上がった。26 この話はその地方全体に広まった。

「笛吹く者たちや騒いでいる群衆」というのは、雇われている人たちです。悲しみや嘆きを、私たちは葬儀の時になるべく抑えようとしてします。けれども、それは良くないことです。葬儀は、悲しみをわざと通ることができるようにする通過儀礼です。他の多くの国では、そこで大声で泣いて悲しみを表します。けれども、行き過ぎもあったのです。その人がいかに大切な人であったかを示すために、プロの泣き屋というものがありました。それで騒いでいるのです。しかし、イエス様が「眠っているのです」と言われた言葉について、あざ笑っています。そして、イエス様は出て行きなさいと言って、群衆を外に出されています。信仰がないのであれば、神の働きに心を閉ざすのであれば、神の働きを見ることはできません。多くの人が、「神がおられるなら、なぜ奇蹟を行なわないのか？」と言います。神は、人の心をこじ開けて事を行われる方ではありません。神を信頼する、という人格的な触れあいがあって、初めてご自分を明らかにされます。ですから、神を求め、信じている者たちの間でご自分の力を示されるのです。

そして、「地方全体に広まった」とあります。死者がよみがえったのですから、当然のことです。これまでも預言者がよみがえらせたことがありました。エリヤまたエリシャがいました。けれども、イ

イエスは、ご自身の権威をもってよみがえらせました。そして、盲目の人の癒し、口の行けないようにしている悪霊の追い出しと続き、もうイスラエルには、前例のないことだと人々がいます。

2B 盲目の癒し 27-31

27 イエスがそこから進んで行くと、目の見えない二人の人が、「ダビデの子よ、私たちがあわれんでください」と叫びながらついて来た。28 イエスが家に入られると、その人たちがみもとに来た。イエスが、「わたしにそれができると信じるのか」と言われると、彼らは「はい、主よ」と言った。29 そこでイエスは彼らの目にさわって、「あなたがたの信仰のとおりになれ」と言われた。

ここで盲目の人が叫んでいるのが、「ダビデの子よ」となっていることに注目してください。福音書を見ますと、イエス様が注意深く言葉を選ばれていることに気づきます。先ほどの、中風の人の癒しでは、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っている」と言われました。人の子は、ダニエル書で確かにメシアの預言に使われているのですが、普通に人間の子とも使われるものであり、いわばぼかしておられます。それは、人々に正確に、ご自分のことが伝わってほしいからです。当時、ユダヤ人の間で、メシア待望の期待感が頂点にまで達していました。メシアが来て、全てを建て直すと人々は熱望していました。しかし、早まってご自身のことが伝わると、イエス様の最大の目的である「罪からの救い」「永遠のいのち」という使命が伝われないまま、間違った形でご自身のことが伝えられてしまいます。また、そうするとご自身が迫害を受け、十字架の上に付けられる時に、単に政治的な理由で弾圧される他のユダヤ人の死と変らなくなってしまいます。ですから、イエス様がご自分のことを伝えるために、早まって人気上がることをないように注意されました。

しかし、今、この二人は「ダビデの子よ、私たちがあわれんでください」と叫んでいるのです。ダビデの子は、マタイの福音書の冒頭に出て来る言葉ですね、まさしくイエスがメシア、キリストであることを言い表している呼び名です。二人はこの方がメシアであると、はっきりと認めているのです。そこでイエス様は慎重になられました。「イエスが家に入られる」とあります。彼らを、人々から引き離して、個人的に話すことができる環境の中に入れておられます。そしてその真意を聞きだしておられます。「イエスが、「わたしにそれができると信じるのか」と言われると、彼らは「はい、主よ」と言った。」とあります。イエス様は、ただわめいていただけではなく、確かに明確に、イエス様がキリストであられて、キリストだからイザヤなどが預言したように、目の見えない者の目を開けることができると信じていたのです。ちょっと、その該当するイザヤの預言を読んでみます。「そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。その時、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。(35:5-6a)」福音書に、盲人や耳の聞こえない者、足の萎えた者、口のきけない者が癒される話が出て来るのは、ここの預言のゆえです。

30 すると、彼らの目が開いた。イエスは彼らに厳しく命じて、「だれにも知られないように気をつけなさい」と言われた。31 しかし、彼らは出て行って、その地方全体にイエスのことを言い広めた。

イエス様は、まだご自身のメシア性が知られるのは時期尚早だと思われました。時がまだ来ていなかったのです。明確にはっきりとされたのは、弟子たちの間だけで、しかもユダヤ人が少ないピリポ・カイザリヤにおいてです。そして公にエルサレムに入られる時に、ホサナ、ホサナという歓喜の声の中ではっきりとされました。イエス様は、ご自身の行ないをもっとお見せになって、それからご自身のことを受け入れ、信じるようにさせようとしていました。私たちは福音宣教において、とかく言葉さえ伝えればよい、となってしまう。けれども、最も強力なのは行ないにおける証しです。そして、私たちの語る福音が確かに真実であると認めることができます。

けれども、二人はこのことを自分たちで抑えることができませんでした。こうなっていくと予測されるのが、パリサイ派など宗教指導者からの迫害、また政治指導者である、ヘロデからの迫害です。人々に知らせつつも、それでも知られないように動かされたのは、宗教的、政治的反対があったからです。けれども、このような慎み深さは、迫害を受けたくないとか、福音宣教に消極的になっているのではありません。むしろ、最大の効果をもたらすために、その時まで大事なところは隠しておく、ということです。

3B 聖霊への冒涇 32-34

32 その人たちが出て行くと、見よ、人々はイエスのもとに、悪霊につかれて口のきけない人を連れて来た。33 悪霊が追い出されると、口のきけない人がものを言うようになった。群衆は驚いて、「こんなことはイスラエルで、いまだかつて起こったことがない」と言った。

ここで群衆の驚きに注目してください。「こんなことはイスラエルで、いまだかつて起こったことがない」ということです。これは何かと言いますと、悪霊を追い出す時に、ユダヤ人たちはまず、その悪霊の名を尋ねます。他の福音書で、イエス様ご自身がレギオンという名を悪霊どもから聞き出されています。そのように名を言わせるのですが、口が利けないのであれば、それもすることができません。ですから、口のきけないようにする悪霊というのは、誰も追い出すことはできないと考えていました。ところが、それをイエス様が行なわれたのです。ですから、「こんなことはイスラエルで、いまだかつて起こったことがない」と言われました。

34 しかし、パリサイ人たちは、「彼は悪霊どものかしらによって悪霊どもを追い出しているのだ」と言った。

これは決定的なものです。イエスがキリストご自身であられ、神から来られた方、そして神の御子であるという証拠が、目の前に出されているのです。しかし、パリサイ人たちはそれを悪霊どもの頭によるのだとしました。これをイエス様は後に、聖霊に逆らう冒涇であるとししました(12:32)。私たちとて、何か正しい働きをしているのに、それを犯罪でも、犯しているような中傷をしたのであ

れば、名誉棄損で訴えることができます。ましてや、聖霊ご自身の働きを悪霊のかしらだとするということは、神に対する名誉棄損です。

このように、古い皮袋というのは悲惨な結果をもたらします。新しいぶどう酒に対して、新しい皮袋を用意せずに、古い皮袋のままдейようとすると、自分たちを破壊してしまうまでに悲惨を自分自身にもたらしめます。パリサイ人たちはついに、自分たちの古いしきたりのゆえに、イエス様を十字架刑に処するところまで持って行ってしまふのです。

3A 働き人のための祈り 35-38

35 それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やされた。

イエス様への反対の動きが少しずつ出てきた中でも、それでも地域全体にイエス様の噂が広がっています。それで、ここに書かれていることは前も行なっておられましたが、これまで以上に広範囲に行なっていわれています。「すべての町や村を巡って、会堂で教え」とありますね。ガリラヤ地方一帯で教えておられたのだと思います。去年でしょうか、ガリラヤ湖の南西、タボル山の近くに日本の考古学チームが、一世紀の会堂の跡を見つけたというニュースが入りました。またマグダラにも、一世紀の会堂が発掘されています。そうしたところに、イエス様は巡っておられました。初めに行われるのが、「教える」ことです。イエス様はラビであられ、安息日毎に決められた律法の箇所を朗読するので、それを行われます。その時に、「御国の福音を宣べ伝え」ます。教えながら、福音を宣言されていったのです。そして、そこで病の人が連れてこられ、また悪霊につかれた人も連れてこられ、イエス様は癒していっていました。

36 また、群衆を見て深くあわれまれました。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである。

イエス様が、深い憐れみを示しておられます。福音書には、何度となく憐れんでおられるイエス様の姿が出てきます。イエス様が行かれる所どこにでも、群衆がやってきました。そこに、ものすごく傷ついた人々が来ています。それは単に肉体の傷だけではなくたのでしょう。そうした病を背負って、精神的にも、霊的にも痛んでいたのをご覧になっていたのでしょう。ちなみに、この「深く憐れむ」というギリシア語「スプランクノン」という言葉の動詞になったもので、これは元々、内臓を表す言葉です。そう、まさしく中国から来たことわざの「断腸の思い」の思いを表す言葉です。イエス様の宣教の動機は、この深い所から出て来る憐れみでした。

「弱り果てて」というのは、「苦しめられていた」とも訳すことのできる言葉です。虐められていた、と言ったほうがもっとはっきりしているでしょう。羊に羊飼いがいなければ、ありとあらゆる虐めを受

けています。狼を始めとして、自分たちの愚かさで崖から落ちていたり、近くに草があるのに気づかずに食べることができず、飢え死にしそうになっていたり、状況は悲惨極まりないものになります。そして霊的に、群衆がそのような敵から虐げられている姿をイエス様は見ておられたのです。私たちも、空中に権威を持つ支配者や、悪霊どもがいて、絶えず、虐めにあっています。イエス様がおられるから、導かれて休みを得て、癒しも受けることができますが、もしそうでなければ、自分たちでは気づいている以上に、はるかに痛んでいることでしょう。

「羊飼い」の働きは貴重です。イエス様は、何度となく羊飼いのことを語られていますが、それは預言者エゼキエルなどによって、羊飼いに対する神からの叱責の言葉が語られていたからです。指導者たちを羊飼いと呼び、民を羊と呼んでおられます。羊飼いは羊を養わなければいけないのに、かえって羊を屠っている、虐げていると責められます。それゆえ、牧者がいなくなり、羊が散らされて、あらゆる野の獣の餌食にされていると言われていました。そこで、主はこう言われるのです。「見よ。わたしは自分でわたしの羊の群れを捜し求め、これを探し出す。(34:11)」主ご自身が羊飼いとなり、捜し求めるのだということです。このために、イエス様が羊飼いとして働いておられるのです。しかし、問題が生じてきました。イエス様も肉体を取られていて、肉体の制限を受けておられます。ご自分独りでこのことを成し遂げられません。そこで次のように祈れと言われます。

37 そこでイエスは弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。38 だから、収穫の主、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」

今度は、羊と羊飼いではなく、収穫と働き手の例えが使われています。後にマタイによる福音書で、種蒔きの例えを始めとして、主のみことばと、みことばを聞いて受け入れた者たちから出てくる実について語られます。収穫、すなわちイエス様に触れられて、イエス様のものとなる人々はいくれども、「働き手が少ない」です。これは、いつも福音宣教の現場で起こっている問題です。弱り果ててしまっている羊、虐げられている羊はとて多く、その人たちに憐れみの働きをしたくとも、その働き手は少ないのです。

そこで祈りなさいと言われます、「収穫の主、ご自分の収穫のために働き手を送ってくだ」さいと。この言葉は、私たち、新しい契約、御霊による働きには、必ず必要なものです。主のお働きは新しく、私たちの必要をことごとく満たしていかれます。そのために、仕え人がますます必要になっていきます。どうか、共に収穫の主、働き手を送ってくださるように祈っていきましょう。ところで、イエス様はご自身も祈られました。次の10章では、十二弟子が選ばれて、ご自身の権威と力をお授けになります。次回は、イエス様によって任される宣教について学んでいきます。